

アメリカ移民の話 4

粕屋町立歴史資料館から借りた二冊の本、安河内隆介著『父と子日米に別れて生きた九十年』および安河内キサ著『句集 青蓮』を参考にこの原稿を書いています。隆介氏のお子様である公二様（名古屋市在住）からも情報をいただいています。興味深いのはその人間関係です。少し整理してみます。もし間違いにお気づきの方、また新たな情報をお持ちの方はぜひお知らせください。今の内に調べておかないと段々わからなくなることを恐れます。（他に二点関係系図があることを把握しています）

アメリカに移民し「コシヨウ王」と呼ばれたのが隆介氏の尊父喜三（きさう）です。以下、敬称略。

喜三は新原の原田藤次、モン夫婦の子です。兄が二人、弟と妹がそれぞれ一人いました。

長男 一郎
次男 龍太郎 陸軍士官学校在学中に病死。
三男 喜三 酒殿の安河内家の養子となる。渡米。
四男 真太郎 喜三と渡米。
長女 カイ

喜三は酒殿の安河内文三郎の娘セ

イと結婚して婿養子となります。この文三郎の甥、言い換えるとセイの従兄弟が上須恵の安河内丈夫、麻吉兄弟です。安河内丈夫は前原にあった養鋭学校（軍人養成の予備教育を行う）の出身で陸軍主計佐官に進んでいます。主計は会計事務に当たります。佐官は大佐・中佐・少佐を言います。大佐となると歩兵なら連隊長クラスです。

安河内麻吉は中学修猷館、第五高等学校（熊本）を経て東京帝国大学を卒業し内務省に入ります。八幡製鉄所次長、福岡県知事、神奈川県知事（関東大震災に対処し復興に携わ

りました）などを歴任した後、内務次官在任中に死去しました。一説に麻吉は勤王の歌人・野村望東尼とも親戚に当たると言われます。望東尼の母は植木の今泉家の出身です。麻吉には子どもがなく、妻由美子の弟光雄（東大卒）が養子に入りました。由美子は金子堅太郎（大日本帝国憲法起草者、伯爵）の養女です。麻吉の葬儀には（昭和天皇の）勅使が差遣されました（写真）。

セイには兄二人がいました。それなら婿養子を取ってもないのですが、兄二人は家を継がずに勉学に励んでいました。長兄孝介は福岡師範学校の第一回卒業生、しかも首席でした。福岡師範は現在の福岡教育大

学です。西公園下に付属小中学校があり、そこに柴田文城の銅像が建っています。文城も第一回卒業生、孝介の親友でした。文城は中野正剛、緒方竹虎を育てたことで知られています。

次兄健次は黒田家の奨学金（現在も（財）黒田奨学会として存続、貸与ではなく給付で返済の必要がありません）を得て中学修猷館、第五高等学校、東京帝国大学と進みました。安河内麻吉とは従兄弟同士で、しかも中学修猷館では共に一、二を争う秀才だったということです。高校・大学はそれぞれ文系・理系に分かれました。健次は健康を害して東大を休学、やがて退学して海軍兵学校の教官になりました。

喜三とセイの間に生まれたのが隆介・泰介兄弟です。セイが病死して後妻を迎え、その間には二男四女が生まれました。

明治三十九年（一九〇六）数え年三十四歳の喜三は実弟の真太郎とともに渡米しました。初めは出稼ぎのつもりがコシヨウ栽培で成功し、永

住を決意します。

まず真太郎が帰国し、妻とともに再渡米しました。喜三も帰国して二年間を過ごし、親族間の調整を図り（当時は跡取りを誰にするかが大問題でした）、帰米した喜三を追って再婚したトモと三男正象が渡米しました。喜三の次男泰介も渡米し、長男隆介は中学修猷館から早稲田大学を卒業して富士紡績に入り、やがて日米関係の悪化によって、父喜三と子隆介が太平洋をはさんで別々の人生を歩むことになりました。それが『父と子 日米に別れて生きた九十年』というタイトルの意味です。

同書二十六頁掲載の家族写真（大正九年）は喜三一家・真太郎一家の計十二人が写っています。

喜三には先妻の子が二人（隆介・泰介）、後妻の子が六人いました。ここには喜三、同妻トモ、三男正象、四女政子（○）、四男守夫（○）。喜三の弟真太郎、同妻クラ、長男辰巳（○）、長女節子（○）。喜三の次男泰介、同妻カネ、長女道子（○）、次女恭子（○）が写っているように

す。男性はいずれも背広・ネクタイ、女性三人は帽子をかぶっています。洋装の幼児五人、乳児一人。（○印はアメリカ生まれ）

計十三人で写真より一人多くなります。夫婦三組に男児三、女児四です。写真に写っている幼児は男二、女三、乳児の性別は不明。したがって子どもたちの内、一人はまだ生まれていないのでしょうか。

他に喜三の長女セイは夭折、次女クニ、三女キサは渡米せず、キサは里子に出されたということです。このキサが『句集 青蓮』の作者です。

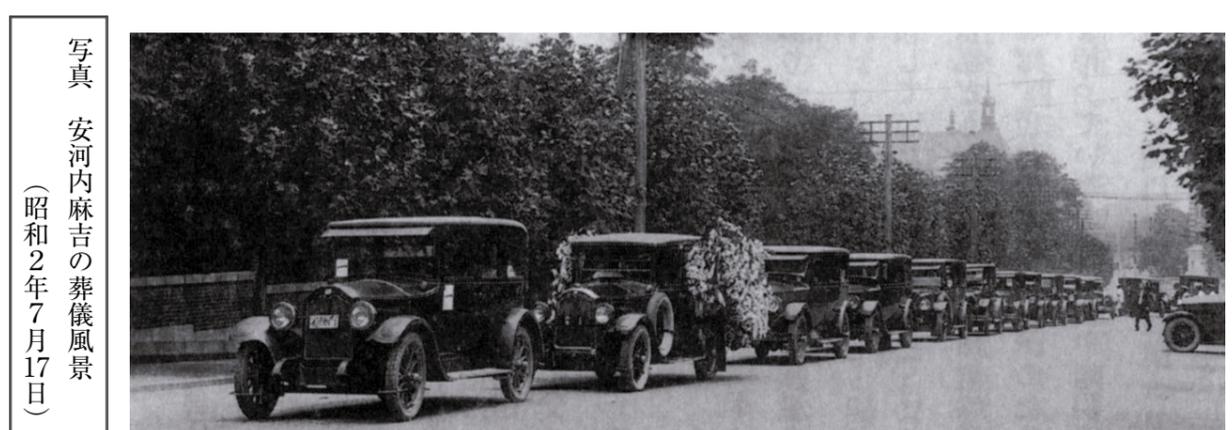


写真 安河内麻吉の葬儀風景（昭和2年7月17日）